

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、8月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（8月）

令和 5 年 7 月 31 日
愛 媛 県

1 気象予報（高松地方气象台）

1 か月予報 7 月 20 日発表（7 月 22 日～8 月 21 日）

〈 1 か月の平均気温・降水量・日照時間 〉

	平均気温（1 か月）	降水量（1 か月）	日照時間（1 か月）
四国地方	低 10 並 30 高 60% 高い見込み	少 40 並 30 多 30% ほぼ平年並の見込み	少 30 並 30 多 40% ほぼ平年並の見込み

〈 予報のポイント 〉

暖かい空気に覆われやすいため、向こう 1 か月の気温は高いでしょう。

2 病害虫の発生予想

水 稲

(1) いもち病（早期栽培：穂いもち、普通期栽培：葉いもち）

ア 予報の内容 発生量：（早期）やや多 （普通期）やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7 月中旬の定点調査では、葉いもち発生圃場率は早期水稲、普通期水稲ともに多、発病程度は早期水稲、普通期水稲ともにやや多である。なお、地域別では、東予の早期水稲主体に発生が多い傾向である。

(イ) 7 月 1 日～23 日までの BLASTAM による葉いもち感染好適条件出現の判定では、感染好適日が 7 月 3 日に 1 地点、5 日に 1 地点、6 日に 4 地点、10 日に 2 地点で認められたが、中旬以降は認められていない（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 窒素質肥料（中間追肥、穂肥）の過用を避ける。

(イ) 圃場観察に努め、葉いもち発生圃場で病勢が進展している場合には、早急に薬剤防除を行う。

(ウ) 今後、出穂期となる水稲では、穂いもち対策として出穂期の基幹防除を必ず実施する。

(2) 紋枯病

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7 月中旬の定点調査では、早期水稲でやや少、普通期水稲で平年並の発生である。

(イ) 普通期栽培の茎数は、ほぼ平年並である。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 早期栽培では、止葉から下位 3 葉の葉鞘に病斑を生じると収量に影響するので、登熟後期の病勢進展が予想される場合には、追加防除が必要である。

(イ) 普通期栽培では、発生状況により応急防除を実施する（要防除密度：穂ばらみ期の発病株率 15～20%）。

(ウ) 薬剤が株元までかかるよう丁寧に散布する。

(3) セジロウンカ

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7 月中旬の定点調査では、早期水稲、普通期水稲ともに平年並の発生である。

(イ) 予察灯での飛来は、6 月 26 日に愛南町（2 頭）、7 月 1 日に西予市（2 頭）、松山市（2 頭）、松前町（1 頭）、7 月 11 日に西条市（1 頭）で初確認した。また、松前町の予察灯においては、7 月上旬に平年より多い連続的な飛来が確認された（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。

- (ウ) 気象予報では、気温は高いとされており、飛来後の増殖に助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 普通期栽培で箱施用剤を処理していない圃場では、発生に注意する。
- (イ) 薬剤が株元までかかるよう丁寧に散布する。
- (4) トビイロウンカ
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 7月中旬の定点調査では、早期水稲、普通期水稲ともに発生を確認していないが、7月21日に南予の一部圃場で成虫を確認している(10株払落し調査：1頭)。
- (イ) 予察灯での飛来は、7月1日に愛南町(1頭)で初確認した(平年：7月28日)。その他の地点では未確認である。
- (ウ) 気象予報では、気温は高いとされており、飛来後の増殖に助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察により早期発見に努める。
- (イ) 今後、出穂期となる水稲では、出穂期の基幹防除を必ず実施する。特に、普通期栽培で箱施用剤を処理していない圃場では、発生に注意する。
- (5) イチモンジセセリ (イネツトムシ：第2世代)
- ア 予報の内容 発生量：並
- イ 予報の根拠
- (ア) 7月中旬の定点調査(普通期水稲・第1世代)では、ツト数はやや少の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 葉色の濃い圃場で被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
- (イ) 圃場観察に努め、発生が多い場合には若齢幼虫期(ツトの発生初期：8月上旬)に防除する。特に、本虫に効果のある箱施用剤を処理していない圃場では注意する。
- (6) フタオビコヤガ (イネアオムシ)
- ア 予報の内容 発生量：少～やや少
- イ 予報の根拠
- (ア) 7月中旬の定点調査(普通期水稲)では、平年並の発生である。
- (イ) 予察灯での誘殺数は、久万高原町で平年に比べやや多いが、前年に比べると少ない。また、その他の地点では少なく推移している(防除所ホームページ掲載データを参照)。
- (ウ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に抑制的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察に努め、8月に密度が急増する場合がありますので注意する。
- (イ) 葉色の濃い圃場で被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
- (7) コブノメイガ
- ア 予報の内容 発生量：(普通期) 並
- イ 予報の根拠
- (ア) 7月中旬の定点調査では、早期水稲、普通期水稲ともに発生は確認されず、やや少の発生であるが、7月20日・21日の広域調査等において、一部圃場で発生を確認している。
- (イ) 予察灯での飛来は、7月20日現在、未確認である。
- (ウ) 気象予報では、気温は高いとされており、飛来後の増殖に助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 葉色の濃い圃場で被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
- (イ) 防除適期は、粒剤では成虫発生最盛期、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7～10日後(若齢幼虫期)である。
- (8) 斑点米カメムシ類 (早期・普通期水稲)
- ア 予報の内容 発生量：やや多～多
- イ 予報の根拠
- (ア) 7月中旬の定点調査(掬い取り調査)では、本田での発生は、早期水稲でやや多、普通期水稲で平年並の発生である。また、畦畔での発生は、早期水稲でやや多、普通期水稲で平年並の発生である。
- (イ) 予察灯でのアカスジカスミカメの誘殺数は、松前町、西予市、愛南町で多く、その他の地点では平年並～少で推移している(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。
- (ウ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場周辺の除草を徹底する。なお、出穂直前の除草は、カメムシ類を圃場内に追い込む可能性があるため、出穂3週間前と出穂時に2回実施すると効果的である。
- (イ) 出穂期の基幹防除で密度を下げ、乳熟期～糊熟期（出穂後10～15日頃）に地域の防除指針に従い防除する。また、多発時には、さらに7～10日後に追加防除を行う。
- (ウ) 要防除水準は、乳熟期の20回掬い取り調査による虫数が大型種で1頭、小型種で3頭である。

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 7月中旬の定点調査では、葉でやや多、果実で平年並の発生である。
- (イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 発病果や発病葉は早期に除去し、園地内の病原菌密度の低下を図る。
- (イ) 強風により付傷すると発病が助長されるので、防風垣や防風ネットを整備する。
- (ウ) 夏秋梢では、ミカンハモグリガの食害痕が病原細菌の侵入箇所となるので、防除を徹底する。
- (エ) ‘愛媛果試第28号’ ‘甘平’、‘はれひめ’等の罹病性品種は注意する。
- (オ) 既に発生が認められる園地では、早めの防除に努める。

(2) 黒点病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 7月中旬の定点調査では、平年並の発生である。
- (イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 枯枝は早期に除去し、適切に処分する。
- (イ) マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は、累積降水量が200～250mm（または散布後30日）に達した時である。ただし、本病に対して罹病性の高い品種‘せとか’、‘河内晩柑’、‘清見’等の散布間隔は、累積降水量150～180mm（または散布後25日）とする。

(3) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 7月中旬の定点調査では、寄生葉率、1葉当たりの雌成虫数ともに平年並である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 園地内の早期多発樹で、1葉当たりの雌成虫が平均2～3頭に達した時期が防除の目安となる。
- (イ) 薬剤は、かけむらのないよう丁寧に散布する。

(4) ミカンサビダニ

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 7月中旬の定点調査では、発生は確認していない。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 被害果は、その後の発生源となるので、早期に除去し適切に処分する。
- (イ) 被害は、園地内で局所的に発生し始めるので、園地観察を丁寧に行い、発生後は早期防除に努める。

(5) ヤノネカイガラムシ（第2世代）

ア 予報の内容 発生時期：やや早

イ 予報の根拠

- (ア) 八幡浜市合田で7月17日（平年：7月21日）、松山市伊台で7月21日（平年：7月25日）に第2世代幼虫の初発が確認され、発生時期はやや早い。

ウ 防除上の注意

- (ア) 防除は、第2世代幼虫初発生から30日後を目安とする。
- (イ) 幼虫初発日は、病害虫防除所ホームページ掲載データを参照。

か き

(1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、果実での発生は確認していないが、新梢での発生はやや多である。また、定点以外の一部圃場で果実の発生を確認している。

(イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 園地観察に努め、発病枝・発病果は早期に除去し、園外で適切に処分する。

(イ) 定期防除に努める。

(2) うどんこ病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、やや多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 通風、採光を図るとともに、園地内の排水を良くする。

(イ) 防除は、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(3) フジコナカイガラムシ (第2世代)

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 防除は、若齢幼虫の発生状況に応じて行い、多発園や常発園では1回目防除の3週間後に2回目を行う。

(イ) 薬剤は、かけむらのないよう丁寧に散布する。

果樹共通 (なし、かき、キウイフルーツ、かんきつ、もも)

(1) カメムシ類

ア 予報の内容 発生量：少～やや少 (新成虫)

イ 予報の根拠

(ア) 集合フェロモントラップでの7月の誘殺数は、5地点とも平年より少なく、予察灯での誘殺数も8地点とも少なく推移している (病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。

(イ) 県内11地点 (7月中旬調査) のヒノキ球果の結実量は、地点によって差はあるが、多い状況である (表)。

(ウ) ヒノキ球果のカメムシ類寄生虫数調査 (10回掬い取り) では、平均捕獲虫数は0.55頭/地点であり、平年 (1.22頭) に比べ少ない (表)。

(エ) 山林からの離脱の目安となるヒノキ球果の口針鞘数は、0.04個/球果 (平年0.9個/球果) であり、過去10年と比べて2番目に少ない。また、新成虫がヒノキを離脱する25個/球果に達している地点はない (表)。

(オ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的であるが、球果の結実量が多く、虫数及び口針鞘数が少ないことから、新成虫の園地への飛来時期は遅くなることが予想され、8月の新成虫の発生は少ない傾向で推移するとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 8月以降は新成虫の発生時期となるので、園地観察により園内への飛来に注意し、発生初期の防除に努める。

(イ) 秋季の台風等による風雨通過後、園地に飛来する場合がありますので注意する。

果樹カメムシ ヒノキ球果調査(2023年7月調査)

調査地	ヒノキ球果 結実量	10回すくい取り虫数						合計	口針鞘数/ ヒノキ1球果
		チャバネアオ		ツヤアオ		クサギ			
		成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫		
新居浜市船木	多	0	0	0	0	0	0	0	0.05
西条市丹原町田滝	中	0	0	0	0	0	0	0	0
今治市大西町脇	やや多	1	0	0	0	0	0	1	0.10
松山市立岩	極多	0	0	0	0	0	0	0	0.05
松山市菅沢	極多	0	1	0	0	3	0	4	0.25
松山市久谷	多	0	0	0	0	0	1	1	0
久万高原町明神	やや多	0	0	0	0	0	0	0	0
内子町五十崎	極多	0	0	0	0	0	0	0	0
西予市城川町土居	多	0	0	0	0	0	0	0	0
西予市宇和町西山田	極多	0	0	0	0	0	0	0	0
愛南町城辺緑	極多	0	0	0	0	0	0	0	0
平均(R5)		0.09	0.09	0.00	0.00	0.27	0.09	0.55	0.04
平年値(H25~R4)		1.05	0.05	0.06	0.00	0.01	0.11	1.22	0.9
今年の順位(H25~R4)		10	3	8	6	1	2	8	10

野菜

(1) 黄化えそ病(夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量: やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 7月中旬の定点調査では、発生は少である。
- (イ) 媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生は少である。
- (ウ) 気象予報では、気温は高いとされており、ミナミキイロアザミウマの発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 発病株は直ちに抜き取り、適正に処分する。
- (イ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では5~7日間隔で2~3回防除する。
- (ウ) 媒介虫は雑草等でも増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。

(2) 褐斑病(夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量: 並

イ 予報の根拠

- (ア) 7月中旬の定点調査では、やや少の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 草勢低下、窒素肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。
- (ウ) 発病初期の防除に重点を置き、葉液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(3) 炭疽病(夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量: 多

イ 予報の根拠

- (ア) 7月中旬の定点調査では、多の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 草勢低下、窒素肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。
- (ウ) 発病初期の防除に重点を置き、葉液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(4) 葉かび病(夏秋トマト)

ア 予報の内容 発生量: やや少~並

イ 予報の根拠

- (7) 7月中旬の定点調査では、平年並の発生である。
 (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや抑制的である。
- ウ 防除上の注意
 (7) 草勢が衰えると発病しやすくなるので、肥切れしないよう適正な肥培管理に努める。
 (イ) 定期的な薬剤防除を行い、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- (5) 炭疽病 (いちご育苗床)
 ア 予報の内容 発生量：並～やや多
 イ 予報の根拠
 (7) 7月中旬の定点及び広域調査では、平年並の発生である。
 (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
 (7) ランナー、葉柄、小葉に病斑が見られる株は、伝染源となるので直ちに除去する。特に小葉は本病に対する感受性が高く発病しやすいので、この部位を中心に発病把握に努める。
 (イ) 降雨によって胞子が飛散するので、降雨前後の防除を徹底する。
 (ウ) 底面・株元給水は雨よけ栽培との併用で本病の防除効果が高い。なお、頭上灌水を行っている圃場では、夕方遅い時間の灌水は避ける。
 (エ) 定期的な薬剤防除を行い、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- (6) アブラムシ類 (夏秋野菜全般、さといも)
 ア 予報の内容 発生量：並～やや多
 イ 予報の根拠
 (7) 7月中旬の定点調査等では、夏秋トマト、いちご (育苗床) で平年並、夏秋なすでやや少、夏秋きゅうりで少、さといもでやや多の発生である。
 (イ) 黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの誘殺数は、平年並～少で推移している (病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。
 (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
 (7) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。
 (イ) 定植時にアブラムシ類に登録のある粒剤を施用するとともに、シルバーポリマルチ等の物理的防除を行う。
 (ウ) ワタアブラムシは、一部のネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が認められている。
- (7) ミナミキイロアザミウマ (夏秋きゅうり、夏秋なす)
 ア 予報の内容 発生量：やや少
 イ 予報の根拠
 (7) 7月中旬の定点調査では、夏秋きゅうり、夏秋なすともに少の発生である。
 (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
 (7) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。
 (イ) 薬剤防除は、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
 (ウ) 卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では5～7日間隔で2～3回防除する。特に多発時には反復散布を必ず実施する。
 (エ) 同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
 (オ) 雑草でも増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。
 (カ) 夏秋きゅうりでは、本虫はメロン黄化えそウイルス (MYSV) を媒介するので注意する。
- (8) ハダニ類 (いちご育苗床、さといも、夏秋野菜全般)
 ア 予報の内容 発生量：やや多～多
 イ 予報の根拠
 (7) 7月中旬の定点調査等では、夏秋なす、さといもでやや多、イチゴ育苗床で平年並の発生である。
 (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
 (7) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。
 (イ) 同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
 (ウ) 多発圃場では、散布間隔を短くして密度抑制に努める。
 (エ) ハダニ類は雑草でも繁殖するので、圃場内外の除草に努める。

(9) コナジラミ類 (いちご育苗床、夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査等では、夏秋トマトで平年並～多、イチゴ育苗床、夏秋なすで平年並、夏秋きゅうりで少～平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 定期的な薬剤散布を行い、葉液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(イ) 同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。

(ウ) 本虫は、多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を徹底する。

(エ) コナジラミ類には、トマト・きゅうりのウイルスを媒介するものがあるので注意する。

(10) ハスモンヨトウ (大豆、さといも、夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) フェロモントラップによる誘殺数は、7月上旬～中旬に増加ピークを示す地点が7地点中6地点あり、7月4半旬現在、4地点で平年より多く推移している(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。

(イ) 7月中旬の定点調査等では、さといもの食害面積率は平年並、20葉当たりの寄生虫数はやや多である。また、いちご(育苗床)で発生を確認している。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め(大豆では白変葉の発生)、若齢幼虫期に防除する。

(11) オオタバコガ (夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) フェロモントラップによる誘殺数は、5地点中4地点で平年より少なく推移している。(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。

(イ) 7月中旬の定点調査では、夏秋トマト(タバコガ類)で平年並の発生である。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

(12) シロイチモジヨトウ (ねぎ、夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) フェロモントラップによる誘殺数は、7月前半は5地点中4地点で多い傾向であったが、7月4半旬現在、1地点で平年より多く、4地点で平年並で推移している(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホーム > 仕事・産業・観光 > 農業 > 鳥獣害・病害虫対策 > 愛媛県病害虫防除所

ホームページアドレスは

<http://www.pref.ehime.jp/h35118/2406/byocyubojo/index.html>

【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。